

「ハラスメンター・パンデミック」

—初稿—

2025/12/22

脚本 太郎

人物表

木原 春人 (40)
淀川 修 (36)
千鶴 (20)

ハラスメント殲滅戦線総隊長
ハラスマント殲滅戦線総隊長補佐
コンビニ店員

1.

ハラスメント殲滅戦線本部・会議室

プロレスのリングのような場所。四方には観客席。

リングの上、ハラスメンターA が倒れている。

向かい合うハラスメンターB 、身体をふらつかせ、力なく倒れる。

歓声。

2.

ハラスメント殲滅戦線本部・会議室

机と椅子が円形に並べられている。座っているのは20人ほどのハラスメント殲滅戦線幹部たち。

プロジェクトからスクリーンに映像が映し出されている。映つているのは柱1と同じ光景。

ハラスメンター殲滅戦線総隊長補佐・東堂修（36）がリモコンのボタンを押すと、映像がハラスメンターバーが倒れたシーンで一時停止される。

東堂 「えー、以上のように」

東堂、机にリモコンを置いて、威厳のある目を前に向ける。

東堂 「前回のハラスメンター・デスマッチを最後に、地上に生息するハラスメンターこと糞どもの絶滅が完了しました」
ざわめき。

東堂、誇らしげな表情。

「我々の掲げる第一目標は見事完遂したのです」

ハラスメント殲滅戦線総隊長・木原春人（40）、苦々しげな表情で震えている。

木原、絞り出すように、

「そんなはずはない」

東堂 「総隊長？」

木原、歯を食いしばって、
木原 「探せ。まだいるはずだ」

東堂、困惑気味に、

「ですが、調査部隊の報告では……」

東堂 机に拳を叩き付ける。

全員、ビクリとする。

木原 「奴らがそんな簡単にいなくなるはずがないだろう！ もつとよく探しエツ！」

3. オフィス街・通り（昼）

高層のオフィスビルが並ぶ広い通り。

木原、周囲に血走った眼を向けて歩いている。
やがてビルの一階にあるコンビニに向かっていく。

入店。

4. コンビニ・店内（昼）

客数はまばら。

木原、飲み物のコーナーに向かう。

ジュースを手に取ると、

店員の声 「ちよつと、また間違つてたよ」

木原、声のした方に顔を向ける。

女性店員の淀川千鶴（20）が別の店員を軽く注意している。

木原、嬉しそうな満面の笑み。

5. オフィス街・通り（夜）

退勤した千鶴が外に出てくる。

物陰から、木原他、ハラスマント殲滅戦線の隊員たちが出てくる。

中央の木原以外、デフォルメされた拳に~~○~~マークが描かれたマスクをしている。さらに、全員鉄パイプなどの凶器を持っている。

千鶴、ギョツとして立ち止まる。

木原、凶悪に笑つて千鶴に指をさし、

木原 千鶴
「お前は糞だ」「え？」

木原、周囲の隊員たちに向けて、

木原 「この女がパワー・ハラスマントの生き残りだ。捕らえろ」

隊員たちが動き出す。

千鶴の悲鳴。

6.

ハラスメント殲滅戦線本部・尋問室（夜）

四方にコンクリート打ちっぱなしの壁。

真ん中に、椅子に拘束された千鶴。力なく頭垂れており、顔は殴られた後のように腫れている。

周囲には木原と、数人の隊員たち。

木原 「ようやく吐いたか、しぶとかつたな」

木原、興奮した表情でナイフを取り出し、「とどめは私がさす。文句はないな？」

ざわつくも、誰も何も言えない様子。

扉が勢いよく開かれ、東堂が飛び込んでくる。

「おや総隊長補佐、遅かつたじやないか」

東堂、木原を睨みつける。

東堂 「白々しい。敢えて私の耳に何も入らぬよう事を進めたのでしょう？」

木原 「言いがかりはよせ、被害妄想はハラスメンターの始まりだぞ」

東堂、納得いかない様子だが、一旦言葉を飲み込み、千鶴を指し示して、

「それより、彼女は本当にハラスメンターなのですか？」

木原 「私を疑うのか？ きちんと本人の自白を引き出したぞ」

木原、千鶴を顎でしゃくる。

東堂 「こんな拷問まがいの尋問で引き出した自白が有効だとでも？」

木原 「さあ？ 我々は別に法律家ではないのでな」

木原、ナイフを持った手を振り上げる。

木原 「もういいか？」

東堂 「待て」

東堂が木原の手を掴む。

木原 東堂を鬱陶しそうに睨む。

木原 「何だ」

東堂 「仮に彼女がハラスメンターだとしても、ハラスメンター・デスマッチに参加させずに殺すなど許されない」

東堂の手の力が強くなる。

東堂 「あれは我々の神聖な儀式のはず——」

木原が東堂の手を振り払う。

そして少し考えこみ、何かを思い付いた顔。

嫌らしく笑い、東堂を指差す。

東堂、いぶかしげに、

東堂 「何ですか？」

木原 「ロジハラだ」

ぎわめき。

東堂 「な……」

東堂 「馬鹿な」

木原、東堂を指差したまま嬉しそうに、

木原 「ツーアウト」

東堂 「は？」

木原 「今馬鹿と言つたな」

東堂 「いや」

木原 「モラハラだ」

ぎわめきが強くなる。

隊員たちは皆顔を見合わせ、どうすれば良いか分からず困っている様子。

東堂、顔をひきつらせて、

「、、、こんな言い分が通るわけ……」

木原、さらに笑みを深める。

木原 「スリーアウト」

東堂 「え？」

木原 「今オドオドしたな？」

東堂 「は？」

木原 「オドハラだ」

東堂、ギョツとして、

東堂 「さすがに聞いたことないぞ」

そこで東堂、ふと思い付いたような顔。

木原を指差し、

東堂 「パワハラだ！」

木原、余裕の笑み。

胸の前で両腕を交差させて×を作り、

木原 「はいバリア」

東堂 「小学生かアンタ」

× × ×

東堂、うずくまり、隊員たちからリンチを浮けている。

木原、楽しげに咲笑している。

木原 「喜べ、総隊長補佐。これで君の大好きなハラスメンター・デスマッチができるぞ」

再び咲笑。

部下たちを仰ぎ、

木原 「さあ、これで分かつたろう?糞どもはどこにでも紛れている」

両手を振り上げ、

木原 「どんどん捕まえろ。毎月100人捕獲がノルマだ。達成できなかつた者はハラスメンター同然として扱う」

終